

氏名	ZAW SOE MIN
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4186号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	The Development of DoBamar Asiayone during the years 1930-1937 (ド・バマー・アスィーアヨウンの形成と発展(1930年-1937年))
学位論文審査委員	主査・教授 新村 容子 准教授 渡邊 佳成 准教授 加治 敏之 教授 永田 諒一

学位論文内容の要旨

本論文は、ミャンマーの独立運動の中で重要な位置を占めたドバマー・アスィーアヨウン（我らのビルマ協会、タキン党）の活動の前半期について、初めて本格的に光を当てた画期的な労作である。メンバーも一新し、ナショナリズム運動の中核を担うことになった後半期に比べて、ほとんど注目されてこなかった前半期について、史料を発掘し、そのメンバーの活動、組織、理念などについてこれまで知られていなかった新たな事実を明らかにし、この時期にこそ後半期の運動の発展につながる重要な基礎が形成されたことを実証しようとしている。

論文の構成は、「序論」「第一章 ミャンマーにおける近代ナショナリズムの成立(1930年以前)」「第二章 ドバマー・アスィーアヨウンの登場とその揺籃期(1930-34年)」「第三章 ドバマー・アスィーアヨウンの発展(1934年後半-1937年)」「結語」の三章からなり、さらに「付録」として、党の性格を考える上で重要でありながらその一部しか紹介されていなかった、「国家改革文書第一号」「第二号」「ドバマーの歌」などの文書の英語訳を付している。

序論では、これまでのナショナリズム運動の研究を整理し、多くの先行研究が、ドバマー・アスィーアヨウンが1938年以降にミャンマーの独立運動を主導し、国内に左翼思想を広めていったことを高く評価する一方、それ以前の時期のドバマー・アスィーアヨウンの活動については、ほとんど言及していないこと、また、言及しているものも表面的な考察にとどまっていることを指摘し、後半期の活動を理解する上でも、前半期の党の活動の全容を明らかにすることが重要であると述べ、本論文の研究史上の意義を明らかにしている。

第一章は、ドバマー・アスィーアヨウンとそのメンバーであるタキンたちが、それまでの政治団体や政治家と比べ、どのような特徴を持っているのかを明らかにするために、1930年以前のナショナリズム運動を概観し、それぞれの団体の性格やその担い手たちの政治理念、運動方針などを具体的に示している。

ナショナリズム運動の第一段階を担った Young Men Buddhist Association (YMBA) は、社会経済の改善を訴えるために1906年に結成された、西洋的なボランティア団体であった。植民地政府に対し忠誠を示した YMBA は政府の支援を受け、1910年代にその勢力を大いに伸張した。1910年代後半に漸進主義者が YMBA の指導者になると、ビルマ政府の行政改革を目標に置き、両頭制を望んだ。1920年 YMBA は General Council of All Burmese Associations (GCBA) と名称を変え、更に活発な政治運動を繰り広げ、ナショナリズム運動の第二段階を担うことになる。さらに学生や僧侶や農民たちが参入し、運動は全国規模に展開し、一層激しくなった。1920年代にエリート活動家たちが自治(Home Rule)を運

動目標に掲げると、これに呼応して一般民衆が強制的な税金の免除を要求し始めた。しかし、1920年代後半数回にわたるエリートの分裂や、政府による圧迫から、ナショナリズム運動は次第に下火になった。運動が再度活発になるのは1930年代に入ってからで、ドバマー・アスィーアヨウンが指導的役割を演じ独立を要求し、ナショナリズム運動の第三段階を担うことになる。

第二章では、ドバマー・アスィーアヨウンの成立とその初期の活動について分析を加えている。

1930年の半ば、「タキン」という名称をつけた若いナショナリストたちがドバマー・アスィーアヨウン（我らのビルマ協会）（後に「タキン党」と呼ばれる）という政治グループを創始した。タキンたちは、ビルマは今外国人の支配下にあるが、ビルマの真の主人はビルマ人で外国人ではないと主張し、それまでのナショナリズム運動とは一線を画し自分たちと旧政治家たちとの違いを明確に示そうとしていたことを明らかにしている。

旧GCBA系政治家たちが政府の行政改革しか望んでいないことを強く批判し、ナショナリズム運動の中で、初めて「独立」を主張するなど、後の運動のさきがけとなる重要な主義主張を有し、ドバマー・ニュース（DoBamar News Bulletin）の出版や、補欠選挙への参加や、プロパガンダツアーなどを行い、彼らの思想を伝えるため懸命に努力した様子を、本論文では丹念に跡づけて明らかにし、また、同時に、その主張はすぐには多くの賛同者を引きつけるところまではいかず、All Burma Youths League (ABYL)を地方で結成して徐々に勢力の拡大を進めていくなど、一定の成果しか獲得できなかったことも明らかにしている。

こうした分析の結果、1930年から1934年10月頃までを、国民の注意を引きながら、将来ドバマー運動に指導的役割を担う新メンバーを集めた時期ととらえ、党の第一期と位置づけている。この第一期の重要な特徴は、ナショナリズム運動で、「独立」を初めて主張したことであるとし、また、第一期を含む初期の活動について、従来の研究は、タキンたちが偏狭なビルマ中心主義者で、人種主義者であった、強い愛国心を持ち盲目的であった、などと述べているが、この時期にタキンたちが出版した「国家改革文書第一号と二号」と「ドバマー・ニュース」や、彼らが作った「ドバマーの歌」や、彼らの活動などを徹底的に検証した結果、タキンたちは国民の民族主義的感傷を何度も刺激したが、彼らの本当の目的は国民の独立の望みを刺激することであり、前述した評価が必ずしも正しくないということを明らかにしている。本論文では、この時期をタキンたちがまだ彼らの政治団体を具体的に結成してはいないが、彼らの思想を国民の中に伝播しながら、独立を初めて主張した時期とし、ドバマー・アスィーアヨウンの活動の歴史の中で、その揺籃期、または、第一期として区分している。

第三章では、1934年の後半から1937年までの活動を丹念に掘り起こし、その性格を明らかにし、ドバマー・アスィーアヨウンの発展期、第二期と位置づけている。1934年10月に党の執行部が暫定的ではあるが初めて組織されたことを明らかにし、それが中心となって1935年3月には党の第一回大会が開催され、学生と農民と労働者たちを組織化することが目標として設定された。学生や農民の組織化は、他の政治団体も試みていたが、労働者たちに最初に注目したのは、ドバマー・アスィーアヨウンであった。

こうした運動方針の成果については、先行研究では、1936年に学生たちを取り込んでいったとされているが、本研究が明らかにしたところによれば、1930年代の半ばにタキンたちは農民と労働者の組織化に一定程度成果をおさめることができたが、学生たちの組織化には失敗し、それが結実するのはもう少し後まで待たねばならなかった。

さらに、社会主義思想をはじめとする左翼思想の普及にドバマー・アスィーアヨウンの1938年以降の活動が大きく寄与したととらえる従来の研究に対して、タキンの指導者たちとインドの国民会議派左派などの左翼運動との交流の事実を掘り起こし、すでに左翼思想にもとづく運動を展開していたことを明らかにしている。1935年の後半に、二人のタキン指導者（タキンバセインとタキンレーモウン）が別々にインドへ旅行した。その旅行でタキンレーモウンはインドの左派とともに左翼運動を経験した。1936年6月党の第二回大会で議長になったタキンレーモウンは独立後に国にSoviet styledの行政制度を確立しようと主張し、1937年2月には、左翼に傾倒した「ドバマー思想と党憲章」を採用した。本論文では、この時期を、タキン指導者が彼らの政治団体を具体的に組織し党の発展のために努力しながら、左翼思想を国内に広め始めた党の「発展期」ととらえ、第二期として区分している。

以上の考察をふまえて、結論として、ドバマー・アスィーアヨウンの活動を、前半期の第一期（1930—late1934）と第二期（October 1934—1937）、後半期の第三期（1938—mid1939）と第四期（mid 1939—early 1942）という、新たな時期区分で考察すべきことを主張し、そうした時期区分による考察の結果、前半期における、合憲的な方法による「独立」の要求、左翼思想の普及への貢献が、党自体の後半期の活動のみならず、ナショナリズム運動全体を主導していくことにつながったことが明らかになったと、述べている。

学位論文審査結果の要旨

審査会は2010年2月12日に、学内審査委員4名によって行われた。審査会の出席者は、審査委員新村容子（主査）、永田諒一、渡邊佳成、加治敏之のほか、参加・聴講者が8名。本論文の審査結果は以下の通りである。

本論文の最大の功績は、これまでほとんど注目されることのなかったドバマー・アスィーアヨウンの初期の活動の全容を初めて明らかにし、その時期の活動が1938年以降の党の本格的な活動の基礎を築いていたことを指摘したことである。

昨年10月の予備審査において指摘された、(1)全体として叙述が平板でやや概説風な論の進め方が散見する、(2)これまでの研究史整理が不十分で、論点が明示されず、したがって結論の重要性が読者にはわかりにくいなど、論文としての叙述、論の進め方を工夫する必要がある、という点は、本論文では十分に修正され、上記の結論も判りやすい形で提示されていた。

また、内容について指摘されていた、(3)運動の発展の分期について、現時点では組織面での発展、運動方針などが分期の基準となっているが、運動の理念、主張の変化にも注目すべきである、(4)論文でも言及されているナショナリズムの対象としてのインド人の存在をどう考えるかなど、さらに深い検討が必要であるなどの点も、それぞれ、十分に考慮に入れて論が進められていた。

その結果、本論文では、以下のような重要な成果が得られたと高く評価された。

- (1) ドバマー・アスィーアヨウンは、植民地支配下の人々の奴隷意識を根絶すると同時に、それ以前の活動家たちとの違いを強調するためにも、当初より、自分たちビルマ人が本来の主人（タキン）であることを主張し、偉大な過去と屈辱的な現在の立場を対比的に描くことによって、人々の民族意識を刺激し支持を得ようとしたことを明らかにした。
- (2) そうした主張を「国家改革文書第一号」「第二号」などのパンフレットの配布によって広めようとしたり、集会のたびに「ドバマーの歌」を歌いわかりやすくスローガンとして訴えようとするなど、「近代的」な手法による宣伝で党勢の拡大をはかろうとしたことを明らかにした。
- (3) しかしながら、その党勢は拡大せず、All Burma Youths League (ABYL)の活動をつうじて一部の地域にのみ支持者を拡大するにとどまったことを指摘した。
- (4) これまでの研究では第1巻第1号のみの発刊で終わったとされていた党の宣伝紙 DoBamar News Bulletins を発見し、少なくとも13号まで発刊されていたことを明らかにし、そこにおいて、それまで間接的に暗示していた「独立」の要望を、インドとの分離問題が大きくクローズアップされた1933年の初頭ころより、明示的に主張するようになったという、党の初期の性格を考える上で重要な事実を掘り起こした。
- (5) これら(1)～(4)の活動を行っていた1930年から1934年10月頃までの時期を、ドバマー・アスィーアヨウンの活動の第1期、揺籃期として区分した。
- (6) 中央執行委員会、全ビルマ執行委員会、2度にわたる党大会の開催、党の綱領、憲章の策定など、党組織の整備と党勢の拡大につとめた1934年の後半から1937年までを、第2期とし、その活動を丹念に掘り起こして事実を確定していき、党の発展期として区分した。
- (7) タキン指導者たちの行動、インドへの旅行とインド会議派などのナショナリストたちとの交渉を具体的に跡づけるとともに、1936年末に構想された党憲章の素案などを検討した結果、左翼思想への傾倒が強く窺えること、ナショナリズム運動の中ではじめて労働者の組織化を念頭に置いてい

たことなどを明らかにし、そうした動きの背景にインドでの経験が重要な意味を持っていたことを指摘し、従来の定説である、1938年以降の社会主義への傾倒の前史が存在することを明らかにした。

(8) 党勢の拡大については、農民、労働者の組織化には一定程度の成功を収めるが、後に党の運動の中核を担うことになる学生については、従来の多くの研究者が説くように1936年初頭の第2次学生ストライキをきっかけとして多くの学生が運動に参加していったとするのは間違いで、1938年まで待たなければならなかったことを明らかにしている。

(9) 1938年以降の活動は展望的に述べるに留まっているが、上述の2期に加え全体を4期に分けて党の活動を理解する見取り図を提示し、従来の説では、無視されるか、1938年以降のドバマー・アスィーアヨウンとは人的にも組織的にも断絶した無縁の存在と理解されがちであった前半期の活動について、本格的な活動を準備した重要な時期と指摘した。

以上のごとく、ドバマー・アスィーアヨウンの活動について、新しい事実を発掘しただけでなく、その評価について、これまでのナショナリズム運動の歴史を書き換えることにつながる視点をも提示したという点で、本論文の意義は大きい。しかし、その一方で、審査会でも指摘されたように、以下のような残された課題もあり、それを解消した上で、ナショナリズム運動の歴史を書き換えるような画期的な研究の完成を期したい。

一つは、残された史料が少なく、また、文書館の公開に一定の制限があるため、限られた史料中での分析は致し方ない部分もあるが、特に初期の党勢の拡大、停滞について、具体的な数値が得られていない部分もあり、より一層の史料の発掘の必要性が指摘された。また、一定の成功を収めたと言われるABYLの活動がより明らかになれば、ドバマー・アスィーアヨウンの初期の党勢の拡大がなぜ全国的に広がっていかなかったのかといった問題の解明にもつながるものと思われること。

二つは、党の指導部への思想的影響として、インド国民会議派などの活動家との交渉の事実は明らかにしたが、それ以外に、植民地の教育制度、ミッションスクールなど、イギリスなど西欧との直接的、間接的な接触、交渉などの知的交流がどの程度関わっているのかなどについての具体的な分析が必要であること。

三つは、以前の予備論文でも指摘された、ナショナリズム運動への刺激と同時に、植民地体制の一翼を担っていたインド人というアンビバレントな存在をどのように理解するのか、今回は左翼思想への傾倒への影響という事実を掘り起こしたが、ビルマ人にとっては憎悪の対象でもあり尊敬し頼るべき存在でもあるインド人階層が運動の発展、停滞とどう関わっていたのか、より深く事実を掘り起こしていくことが必要であること。

最後に、前半期に光を当てることによって、独自の時期区分を提唱し、運動全体の理解にむけて大きく前進したが、その分期自体については、やや不明確な部分も残っており、運動方針、組織の拡大、指導者と一般の構成員、支持者の動きなど、史料的限界もあってその解明には困難を伴うが、より詳細な事実を明らかにして、時期区分の妥当性を高めていく必要があること。また、今回の論文の対象ではないが、後半の活動をももう一度史料にもとづいて丹念に跡づけて、全体の運動の発展の歴史を明らかにしていく必要があること。

総じていえば、本論文を主体にして、さらに丹念な史料発掘と事実の解明を行いつつ、対象時期を後半期まで広げて、ドバマー・アスィーアヨウン全体の歴史を完成させることが求められるが、それは、今回の論文の範囲を大きく超えており、次の段階の課題といえる。

以上、さらに大きな研究の完成に向けての幾つかの発展的な指摘がなされたが、審査委員全員一致で、本論文自体は博士論文として十分な水準に達しており、博士の学位にふさわしいものと判定した。